ガールズラブ

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガールズラブ

【Ｎコード】
Ｎ９２９５Ｃ

【作者名】
春月桜

【あらすじ】
名前が宮沢諦（みやざわあきら）。男みたいな名前から、クールすぎてつまらないと、いつも一人ぼっちな諦に、乙色棹歌（いつしきさおか）が話しをかけるが・・・・・・。

（前書き）

言葉が簡単すぎて、よくわからないところもあるかもしれませんが、最後まで楽しくよんでいただけたら、いいなと思っています。

ガールズラブ

1、かげがえのないもの……

私は宮沢諦（みやざわあきら）。

性別は女。

みんなはあきらと聞くと男と間違える。

みんな、名前とかで、決め付ける。

私は親にも、捨てられ、クラスの男子達にいじめられ、この名前のせいで、傷ついてきた。

私は今は、中学二年生。

やっぱり、クラスの人に、男と間違える。

「あきらって、男じゃないの？」

女子達の口からはいつも、その言葉。

あきた口調。

小さい頃から言い続けられてきた、言葉。

ただ、「ちがう。」としか、じゃべらない私の口。

それは、とても、つめたい口調。

そして、そこから、みんな去って行く。

私を冷たい人間と勘違いしながら。

まあ、それは、私にとっちゃ当たり前のこと。

ただ、それは、とても、寂しいと感じることは当たり前。

ずっと、一人。

ずっと、ずっと、ずっと。

みんな、近寄ってくるのは、最初の時だけ。

また、いつもの、一人が始まる。

そのはずだった。

「宮沢　諦ちゃん。よろしくね？」

一人の今時の可愛い女の子が私に声をかけてきた。

「誰だっけ？」

私は声をかけてきてくれた子に、つめたく声をかえした。

「ひどーい。覚えててくれなかったの？私は乙色(いつしき)棹歌(さおか)結構めずらしいでしょ？」

棹歌ちゃんは、とても、今時っぽくて。

私とは、全然ちがかった。

「棹って呼んでね。」

棹歌ちゃんはにっこりして、私に言った。

「なんで、あんた、私に声かけんの？」

私は棹に言った。

「だって、同じクラスだし、仲良くしたいなって思って。今、みんなに声かけてきたの。みんな、私がすきになればみんなだって、こたえてくれるよ。」

棹はとても、純粋で、私と正反対だった。

「諦ちゃんは友達とか、作んないの？」

棹は私に聞いてきた。

一番答えにくいことを。

「……。」

私は何も出なかった。

棹は私の答えを待ってる。

「作るよ。」

私は言ってしまった。

うそを。

せっかく、来てくれたのに。

「だよね。」

棹は信じ込んでしまった。

「一人じゃ、寂しいもんね。」

棹はそう言って、違うところに行ってしまった。

どうしよう、うそついちゃった。

でも、友達の作り方なんて、知らないし。

「なあ、あきらって男じゃねえの？」

私は男のやつらの言ってることに聞き耳を立てた。

「俺も、はじめて女で諦って聞いた。」

私は心の中で、そうだろうなと言った。

「かっこいい名前付けてもらってるって思うけど。女だからなー。」

私だって、好きで、この名前をつけてもらってなんかないよ。

私は心の中でも、嫌な思いがあふれ出そうになったのでとりあえず、校庭のグラウンドで、走ってこようと思った。

私は、走ることが好き、結構スポーツ系なのだ。

体育はいつも、5。

特に短距離が得意。

私が廊下に出たとき。

また、棹が私を呼びかけた。

「諦ちゃんー。どこに行くの？」

棹は首をかしげながら、私に聞いてきた。

「グラウンドで、気晴らしに走ってこようと思って。」

私はすらすらと、言葉が出てきた。

いつもなら、グラウンド。

っとか、別に。

っとか、そうゆう、長い言葉はいつも、人には、話すことは、なかなかないのに。

棹にだけ、言葉が出てきた。

「私も、一緒に行っていい？」

棹はニコッと笑って、私に聞いてきた。

「別に。いいけど？いいの？あの人達と一緒にいなくて、あんたまで、変なふうに見られちゃうよ？」

私は棹に言った。

何気に、ちょと、胸が苦しくなった。

「ううん、なんかね？普通の女子よりも、諦ちゃんといたほうが楽しいの。」

棹は私より、全然ちがう子で、女の子っぽくて。

私と正反対。

でも、なんとなく、一緒にいると落ち着くのだ。

グラウンド……

私と棹はグラウンドについた。

「いつも、こうやって、走ってるの？」

棹は聞いてきた。

「うん。走るのがすきなの。小学校だって、一年から、六年まで、全部、リレーの選手になったんだよ。」

私はちょっと、自慢げに言った。

てゆうか、自慢だったけどね。

「すごーい。私、一回も、リレーの選手になんかなったことないよ。」

棹は可愛く言った。

私には、ちょっと、ぶりっ子に見えた。

けど、私は女の子に弱い。

「別にそんなまでいかないけど。」

私は照れながら、走った。

棹といるときは、とても、楽しくなった。

そして、それから、二週間たった、ある日のこと。

帰り道、私は帰るときに、変なところを見てしまった。

棹が帰るところにいきなり、五人ぐらいのチャラついた男達が来て、棹を取り囲んで、暴れる、棹を無理矢理、車に投げ込んだ。

私は、その車を追いかけた。

そして、追いかけていった、先は、古い何かを作る、工場。

私は、ドラマで見ているより、とても、怖くなった。

でも、棹はここに、連れてこられたはず。

ガラッ

私は真正面から、入った。

おっきな、扉をがらがらと音を立たせながら入った。

そして、目の前に、あったものは、ドラマで見たよりも、迫力のある二十人ぐらいに、不良のやつらだった。

目には傷、どこかしら、傷があるやつらばっかりだった。

「お嬢ちゃん、ここは、君見たいな子がくるところじゃないんだよ？」

手下のようなちょっと、チャラチャラしてる奴が私にガンをとばしながら言ってきた。

それほどまでには、迫力はなかった。

「その子も、私と同じぐらいの、歳の子だよ？」

私はにらみかえしながら、言った。

「てめ、俺らに、喧嘩うってんのか？あ？」

また、手下が言った。

「言っとくけど。これでも、空手やってるんだけど。もしかしたら、擦り傷だけじゃないかもよ。このタイマンで、私が勝ったら、その女の子返してもらうよ？」

私は人差し指を、私のほうにくいくいっと、「来い」と、やってやった。

いっせい私に飛び掛ってきた。

私は空手を習っていたので全然相手にならなかった。

私はパンパンと、手をはらった。

「ちょろい、ちょろい。」

私は、眠らされている棹の方に近づいた。

「何で、こんな、かよわいのかな？」

私は心配顔で、眠っている、棹に話した。
私は眠っている棹の唇にそっと、キスをした。
これが、好きってことなんだ。
私にはやっと、かけがえのない物ができた。
それは、棹歌、君だよ。

2、ムカつく、男。

すっかり季節は春から夏へと変わった。
せみが大きな音をたてる。
熱くて勉強のやる気がうせる日。
夏休みは、まだだけど。
何故かこんな季節に私のクラスに転入生が来た。
そいつは、男。
とても、私には気が合わない奴。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

「今日は、転入生を紹介するぞー。」

教室中に先生の声が鳴り響く。

私はしたじきで、自分をあおぐ。

あせが首筋を通るのがわかった。

「入っていいぞー。」

ガラッ

入ってきたのは。

今時の男で、スポーツ万能の、元気いっぱいのやつ。

小学生レベルだと、思えるぐらいの奴。

「こんにちはー！！みんなーこの中学校のこと、教えてねー！！」

この男は、青坂（あおざか）懐賭（かいと）。

私には、最悪で大嫌いな性格の奴。

・・・

「じゃあ、青坂の席は、乙色の隣だな。」

先生はにこやかに言った。

多分その時の私は黒いオーラを出していたに違いない。

「はーい。」

すたすたすた……

「よろしくね。乙色さん。」

青坂は、棹にニコッとして、挨拶をした。

「じゃあ、数学始めるぞー。」

先生が言ったとたん、教室中に『えー!!』っと、響き渡った。

「あ、先生、僕の教科書全然違います。」

青坂が立って先生に言った。

「あー、そっかー。じゃあ、乙色見せてやってくれ。」

先生は棹にたのんだ。

「はい。」

棹はいい子だから、すぐに先生の言うことを聞いてしまう。

「ありがとう。」

青坂は犬みたいな顔で、喜びながら、棹に言った。

机をくっつけて、棹は棹の机と、青坂の机の隙間のほうによせた。

青坂はよりそって、教科書を見る。

私はイラついた。

すっごい、胸の中が苦しかった。

もちろん、青坂にだって、むかつく。

でも、一番むかついてることは、棹が私のものじゃないってこと。

キーコーンカーンコーン……

お昼休み……

「棹ー一緒にお昼食べよう。」

私は食堂のパン屋で買った焼きソバパンとオレンジジュースを持って棹の机の方に言った。

「うん。屋上行こっ。」

棹はいつものように、席を立つ。

その時。

「俺も行っていい？」

青坂は私と、棹に聞いてきた。

「いい？諦。」

棹は私に聞いてきた。

「別に…。」

私はそれだけしか言えなかった。

「いいよ。青坂くん。」

棹はにこやかに青坂に言った。

「やったー。」

相変わらず、犬の顔をして、喜ぶ青坂。

こうやって、女を自分のとりこにしてるのがとてもわかった。

そして、ついてきたこの犬っころは、とても、おしゃべりで食べてるときだって、ずっと、ぺちゃくちゃ。

私はぶちげれる寸前まで、いった。

でも、なんとか、おさえて、パンを食べる。

キーンコーンカーンコーン……

そして、帰り、私はかえる準備を、おえて、帰ろうとしたとき。

「待って、諦！」

棹に呼び止められた。

「何？」

私は呼びかけられた。

「え、一緒に帰ろうと思って。同じ方向でしょ？」

棹は私に満面の笑みで、言った。

「うん、そうだね。一緒に帰ろ。」

私は、早く帰りたいで、頭がいっぱいだった。

「やった。」

棹の笑顔だけは、私は頭に入ってく。

満面じゃなくても。

「俺も、いい？」

予想どうり、あの犬っころもついてきた。

「え？いい？青坂君いても……。」

棹は私に聞いてきた。

「別に。」

私はちょっとだけ怒りながら言った。

「い…いいって。」

棹はちょっとつまりかけた声になった。

「やった、ありがとう。」

犬っころめー！！！私は心の中で、むしゃくしゃしながら、暴れてる。

でも、私は表に出せない。

棹がいるから。

帰ってる途中も、ぺちゃくちゃぺちゃくちゃ。

すっごい耳障り。

うるさいのなんのっていったら。

言葉じゃとても、いえないくらい。

すごかった。

「じゃ、ばいばい、諦。」

棹は思ったよりも、何も、言わなかった。

「うん、また明日。」

あっさりした言葉に私はちょっとがっかりしながら言った。

作り笑いで。

私は楽しそうに話しながら歩いてくあの二人の背中を見ているだけだった。

翌日……。

キーンコーンカーンコーン……。

朝休み。

私はまた、グラウンドに走りに行った。

そしたら、棹もついてきた。

そして、その後には、やっぱり犬っころがついてきた。

私はムカムカマークがおでこに六つもできて、おまけぶちっと、きれてしまった。

「何でいつもいつもついてくんだよ、てめえ！！」

私は怖い顔になって、怒りにみちた。

「何でって……。」

犬っころは黙りだした。

一分ぐらいまった。

「俺、棹歌ちゃんが好きなんだ！」

いきなり、犬っころから、出た言葉がこの言葉。

「いきなり何？何でこんなときに告ってんの？意味不明！！」

私はまた怒った。

てゆうか、私は犬っころを棹から、離そうと思った。

でも、逆に棹は怒ってしまった。

「何で諦こんなにがんばって告白してくれたのに、ひどい、諦！！」

私は棹からこんな言葉が出るとは思わず沈黙してしまった。

それから、棹は「ふんっ！」っといって、教室に犬っころと一緒に戻っていっってしまった。

私は頭を抱え込みしゃがみこんだ。

「こんなはずじゃなかったのにー！！だから恋愛は嫌いなんだよー！！」

私は逆ギレしてしまった。

ベリーショートカットで茶髪がまざった髪の毛をぐしゃぐしゃっと、かいた。

3、仲直りがしたい、その思いの行方……。

私は、もう、つらくてしかたがない。

一人に久しぶりに戻った。

とても、心細くて、寂しい。

キーンコーンカーンコーン……。

チャイムが鳴り、帰る。

「棹、ちょっと、来な。」

私は、棹を呼んだ。

「何？」

棹はちょっとだけ目をそらしながら、私に問いかけた。

「あいつとつきあうことになったの？」

私はちょっと、顔を赤くしながら言った。

「え？」

棹は首をかしげながら私に聞き返した。

「だから、あの犬っころと、付き合うのかってきいてるの！」

私はやけになって言った。

「つきあわないよ。だって、私の好きなタイプと違うもん。私、ああいう、顔を変えたりする人好きじゃないもん。でも、告白はうれしかったよ。」

棹はにこっとして言った。

そのときの棹の顔はどことなく寂しげなところがあった。

「棹、今日一緒に帰ってくれる？」

私は聞いてしまった。

「プハッ！諦可愛い、顔赤くしながら言ってるから、どうしたの？らしくない。」

棹は笑いながら私に言った。

そして、帰り道。

「じゃ、また明日ね。」

棹はにこっとして、手をふった。

「ちょっと、まって。棹歌。」

私は棹を呼び止めた。

「何？」

棹はこっちにふりむきながら、近づいてきた。

「棹歌、もし、私が、棹歌のことが好きだったら、棹歌はどうする？」

私は思い切って言ってみた。

「好きって、恋愛のこと？」

私はコクンとうなずいた。

「うーん、私は諦とだったら、つきあってもいいよ。」

棹歌は、ほっぺを赤くしながら私に言った。

「本当にいいの？」

私は聞いた。

そして、棹歌はコクンとうなずいた。

私はそういってから、棹歌にキスをした。

たった一つのかけがえのないもの。

それは、棹歌。私のたった一人の恋人。

女だって女同士の恋がしたいんだ。

（後書き）

これを読んでいるということは、最後まで、読んでくれているということですね。
どうもありがとうございます。
楽しんでいただけていたら、とても、うれしいです。
感想・評価を書いてくれたら、すっごくうれしいです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9295c/

ガールズラブ

2011年3月27日08時50分発行